

き もり
樹 守

—日本樹木医会北海道支部会報—

1997年4月17日 発行 発行人 小田島 恍
(平成9年) NO. 7 編集人 館 和夫

事務局 ☎060 北海道札幌市中央区北4条西5丁目
北海道森林保全協会内
☎011(251)4151

随 想

※しっぺいがえし※

館 和 夫

まもなく桜の開花を迎えようという折から、「しっぺいがえし」とは、なんと無粋な題名をつけたもの……と、我ながら気がひけるが、書き続けることにしたい。

ところで、「しっぺい」とは何かということであるが、広辞苑を引くと「しっぺい」の意味は、大きく分けて2つあり、そのひとつは禅の指導者が修行者がに対して用いる竹へら状の道具（しっぺい、漆を塗り藤を巻いて作る竹篋）であり、いま一つは、子供のいたづらか或いは懲らしめのためか、片手の人差し指と中指をそろえて相手の手の甲や手首などを打つことであるという。

いずれの場合も、打たれたら、また相手に打ち返すことからしっぺいがえし、またはしっぺ返しといい、ある仕打ちを受けたらすぐに仕返しをする意味で使われるようになった。

普通は人間対人間の間で行われる行為であるが、その関係を押し広げていけば、自然対人間の間にも成立する1種の緊張関係といえよう。

もちろん自然自体が人間に対して 意識的な対抗関係を持つということではないが、擬人化して考えれば、まさに自然が人間に対して行ったしっぺいがえしとしか考えられないような現象が最近きわだって多くなっているように思う。

最近、自然界にある種のダメージを与えたか、または与える可能性のあった大きな事件や話題を拾っただけでも、相次ぐタンカーの油流出事故や原発事故、静かに進行しているフロンガスによる極地の空のオゾン層の破壊、二酸化炭素による地球温暖化の危険等があげられる。

われわれにとって、もう少し身近な木に関する話題だけを拾ってみても、毎年春先に問題にな



杉の切枝の先端で交尾する
スギノアカネトラカミキリ

るスギの花粉症の問題とか、今では東北地方にまで猛威を振るっているマツ枯れとか、近ごろ、道南地方における発生状況が報道されて注目を集めているスギノアカネトラカミキリのような材質劣化害虫の問題などがある。

とくに後者は、地域住民が日頃から大切に保護している公園・並木・神社仏閣などに生立する由緒ある巨樹名木・美林が、その繁殖源となっている場合が多いので、問題は深刻である。今や全国で450万haにも達したといわれるスギ人工林、その中のたった3万haにすぎない道内のスギ人工林であるが、本州方面でつとに問題化してるさまざまなマイナス面が、最近になってようやく問題になり始めたということであろう。

いづれにしても生態系のバランスを無視しておこなわれた人間の侵略に対する自然界からの痛烈なしっぺいがえしにほかならない。

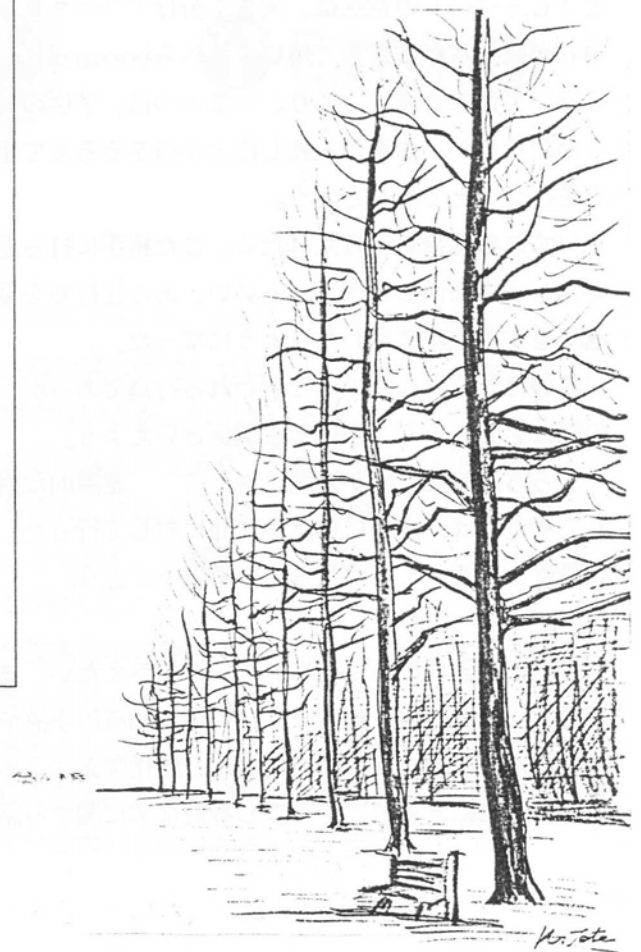
古人がいみじくも「天地に大算盤というものあり」と、喝破したような生態系のバランスの大切さを、今一度かみしめてながら自然界との関係修復をはかるよう、われわれ人類はそろそろ自らの行動様式を早急に変えていく必要があるのではないか。原点に立ち返っての自然保護のかたちはどうあるべきか、そういったことにいまさらながら思いを巡らしている今日この頃である。

！！原稿募集！！

〔樹守〕は会員の皆様のものです。樹木の保全・保護に関する話題や研究成果など、どんな小さな事でも結構ですから事務局へお寄せください。

ワープロ原稿で、A4判の横書き、1行40字、1ページ当り38列にまとめて下されば助かります。

なお、編集の都合上、原稿の長さや図表の大きさ、表現の仕方などを多少調整させていただくことがありますが、あらかじめご了承ください。



春を待つ公園の裸木

本紙が出る頃にはいつもいささか旧聞に属することになってしまって恐縮なのであるが、今年も晴れて樹木医の難関を突破された新人樹木医に、まず自己紹介と共に抱負を述べていただくことにしたい。



入会ご挨拶

岩見沢市 福士正明

この度、日本樹木医会北海道支部に入会させて戴くこととなりました。皆様方のご活躍ぶりにつきましてマスコミなどを通じて承知しております。深い敬意を表するとともに、そんな皆様の仲間として果たしてやって行けるのか、いささかの不安もありますが、皆様の足をひっぱらないように、さらなる研鑽を重ねて参りたいと思います。

簡単に自己紹介をさせて戴きます。

出生地は岩見沢市です。中学、高校を稚内市で過ごし、昭和33年北海道大学農学部林学科を卒業し、教職につきました。教職歴は、帯広農業高校に21年、岩見沢農業高校に7年の計28年間林業科の教員として林業技術者の育成に携わり多くの卒業生を林業界に送り出しました。その後は、留寿都高校、倶知安農業高校、旭川農業高校に勤務し、平成7年3月に深川農業高校を定年退職しました。

定年退職後は、林業の知識・技術を活かせる職場をと考えておりましたところ、その望みがかなって岩見沢市緑のセンターで緑化相談員として第2の人生をスタートすることができました。

緑化相談業務は草花、洋らん、山野草、菜園、果樹、庭木など緑一切が対象であり、長年農業教育に携わってきて、植物に関する知識についてはいささか自信めいたものもありましたが、相談が始まるとその自信も一瞬にして吹っ飛んでしまいました。というのも、緑はその分野の広さ、奥の深さは、生半可な知識ではとても対応できません。園芸図書に没頭する日々です。せめて、自分の専門分野ぐらいいはしっかりした知識を身につけたいと考えて、樹木医に挑戦することとしました。

幸いに、すぐ隣の街に中内樹木医がいらして指導戴く機会に恵まれ、研修生選抜試験に合格することができました。

研修所では、出席番号が一番のため研修生代表の大役をおおせ付けりましたが、前田樹木医に助けられ、何とかその任を果たすことができました。

私たち6期生は、平均年齢が48.1歳と若く、真摯に精力的に研修に取り組む集団でしたので、60の手習いの私にとってはかなりハードな研修でした。

樹木医となった今、自然環境保全に微力ながら尽力したいと考えています。地球温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊など自然環境の破壊が深刻化しています。

私たちが健康で生きて行くためには、地球環境がそれに適した状態で保たれていることが大切と考えています。緑は生きとし生けるものの命の源と思います。庭の緑から、地域の緑を、そして地球の緑の守り手として、緑豊かな環境を次代に継承して行くために全力を傾注することを決意しているところです。

皆様のご指導をよろしく願い申し上げます。



樹木医になって

前田吉彦

このたび第6期の樹木医として皆さまの仲間に入れていただくことになりました。どうかよろしく願いいたします。

単なる淡いあこがれから関東以北親戚もいない北海道に学生として渡ってきてはや40年、居心地が良過ぎたのか地元の女性と結婚したのが悪かったのか、今やテコでも北海道を離れようとしないう家族のおかげで、私も堺市に独居する老母の存在さえ忘れればもはや道産子そのものです。

社会人の第一歩が道有林の直営造林事業の現場監督で、育苗・育林を含め10年余り、それから十勝に移って林業専門技術員を7年ほど勤めました。

昨年、首席林業専門技術員を最後に道を退職しましたが、振り返って見ると十勝時代は造林全盛時代で、林業・樹木相談も多く随分現場歩きをしたり現小田島支部長と共同研究させていただくなど、最も充実し楽しかったように思います。

昭和55年から現在まで真駒内のおんぼろアパートに住んでいますが、飯場生活を経験したせいか10時就寝4時起きの典型的な朝型人間で、夏は真駒内公園、冬は住宅地を必ず1時間余り散歩するのが日課となっています。

そのせいか商売柄関心もあって公園内外の樹木の配置や過去の被害の経歴、その後の措置等、毎日の観察のおかげではぼ頭の中に入っています。

一昨年妻の勤めもあり初めて樹木医試験を受けたのですが、十分自信があったのに落ちてしまい、子供達から親父の役職なんて上げ底じゃないかと言われてしまいました。このままでは親父の沽券にかかわると昨年再度挑戦したところ、今度は難解な問題ばかりで全く自信がなかったのに幸い合格して約半月の研修も無事通過し、やっと面目を保った次第です。

さて本道の造園、公園管理についてはここ数年前から随分お金をかけるようになり、技術水準も上がっているように思います。

過去真駒内公園の例で言えば昭和56年の台風被害木にコンクリートを母材とした下手な外科手術をしたり、周辺の盛土で自生していたニレを枯死させたり、橋のかけ替えにともない下手な根回しでニレの大木を移植して枯死させたりしましたが、今は癒しゅ病の桜を植え替えたり、柏の孤立大木を土壌改良で活性化させたり対応も適切になりつつあります。周辺の住宅地でも冬期間の雪つり、雪囲いはほぼ常識となり、竹柵等も散見されるようになりました。今後私もこうした都市周辺の緑の維持管理に微力ながらも貢献できればと思っています。

〔樹木医学研究会〕から

—樹木診断に用いられる最新の機器—

小田島 悦

平成8年9月に下記案内のとおり樹木医学研究会の2回目の研究会が開催され、会員の皆様にもご案内いたしました。支部からの出席者は小生のみでしたので参考に研究会の概要をお知らせします。

樹木医学研究会の研究会案内

テーマ : 老木木の診断器機—現状と問題点「今、どんな器機が使えるか」

時間 : 9月20日14:00~17:00

会場 : (A. 前半) 東京農工大学農学部 (府中市幸町3-5-8)
(B. 後半) 大国魂神社ケヤキ並木 (京王線府中駅脇)

見学内容: 腐朽診断器機などの測定実演 (A)

国指定天然記念物のケヤキ並木の現状 (B)

集合場所: 東京農工大学農学部講義棟4階 視聴覚室

話題提供: 渡辺直明

展示器機: レジストグラフ (材内の貫入抵抗測定器)、インパルスハンマー (材内音速測定器)、フラクトメーター (生長錐試料強度測定器)、シャイゴメーター
AE検出器、熱画像装置、葉緑素計など

展示者 : (株)東邦レオ、(株)エコル、農工大 (佐藤敬一) ほか

参加者は約50名で、講義棟での講義と構内での実演で予定時間が超過し、薄暗くなったため後半に予定されていたケヤキ並木の視察は中止された。

講義は東京農工大農学部佐藤敬一氏による「AEを利用して植物の「鼓動」を聞く」と渡辺直明氏の「腐朽部診断の方法と器機」であった。詳細は別刷の資料を参照してください。

実演は構内のナラタケモドキの被害を受けたシラカシとヤマザクラの伐倒材と切り株を対象に実施した。展示・実演された測定器機は次のとおりである。

(1) インパルスハンマー

幹の両側にボルトをねじ込み、一方をハンマーでたたいて、そこから発する振動波がもう一方のボルトに達する時間を計測して、内部に空洞や腐朽があるか否かを判定する器具である。内部に腐朽があるとその部分で振動波の速度が遅くなるので、健全材に比べ伝わる時間が余計にかかる。ヨーロッパの多くの樹種で、健全材における伝達速度があらかじめ調べられているので、それと比較することで欠陥の有無がわかる。

国内の樹種についてのデータの実績がないので、渡辺直明先生のもとに神庭さんが調査事例を集積しているそうです。道内で使用する場合は自生種が本州と異なるので、樹種毎の健全材の伝達速度の調査が必要となる。

(Clockから打ち出されたDATA)

```
Date          :
Species       : w/o Spec.
Diameter      : 30.0 cm
Sonic velocity : 1546 m/s
```

(2) フラクトメーター

生長錐で取り出したコアの曲げ強度や圧縮強度を測定する器具でいくつかのタイプがあるが、コアに手で力を加え、その角度と力をバネで測る簡単な構造である。得られた数値により、材の健全さの程度、腐朽が脱リグニンかセルロース分解によるものか判定する。

(3) レジストグラフ

直径3mmの細い錐を電動（バッテリー内蔵）で押し込んでいくとき、材の堅さに応じた抵抗の大きさがそのまま波形グラフとして表示される。年輪の春材、秋材に応じて細かな波形が現われるので年輪数や幅が分かり、腐朽部や空洞部の存在は抵抗が抵抗が小さくなるので判る。腐朽部の直前では時に硬度が急激に増大し、波形が急峻な頂になって現われるが、これはシャイゴ博士の言う腐朽に対する「防御層」と説明されており、波形の状態によってそれが完全か不完全かが分かると言う。錐の長さは30cm、40cm、50cmの3種類ある。

(4) シャイゴメーター

パルス電流を用いて電気抵抗値を測定する。Shigometerは腐朽部におけるマンガンやカルシウムなどの陽イオンの集積で抵抗値が下がることを利用している。

ドリルで穿孔して直接腐朽部にプローブを挿入して抵抗値を測定する。

(5) 赤外線画像装置

樹体の健全度の指標として枝葉の一部や樹冠、樹幹の温度分布を撮影する。

(6) 葉緑素計

葉の健全度の指標として葉緑素の測定を行う。

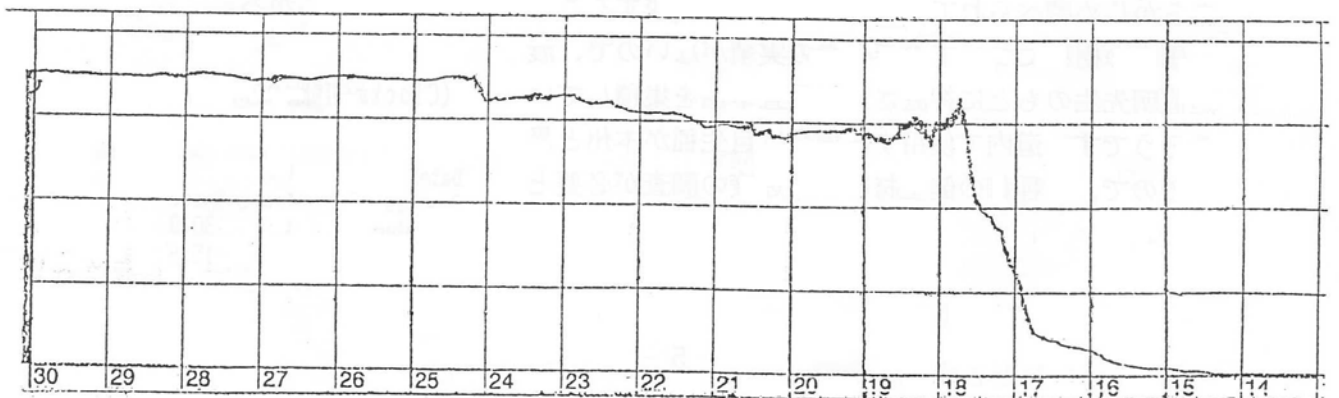
今回の展示・実演の機器のうち腐朽部診断の機器は(1)～(4)であるが何れも樹体に孔をあける診断手法で非破壊検査とは云えないが、インパルスハンマーは比較的浅い深度のボルトのねじ込みで済む。

(5)・(6)は健全度の測定機器である。

実演された機器のなかでは、レジストグラフが実用的と思われ腐朽の定量的な把握が可能であるが、実演のグラフでは年輪数の把握は困難と思われた。但し輸入品のため(株)東邦レオによると、最終価格は150万円位になるそうである。

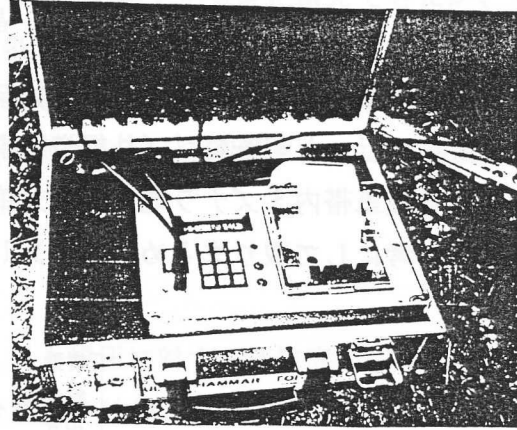
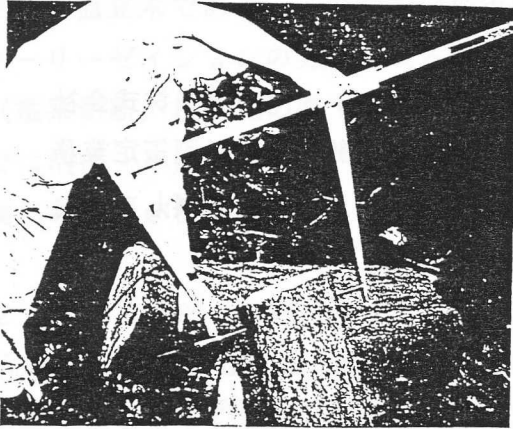
なお、GREEN AGE 3月号に堀 大才さんが「VTA法による倒木危険度評価」で詳しく紹介しています。

(レジストグラフで感圧紙に打出された波形グラフの一部)

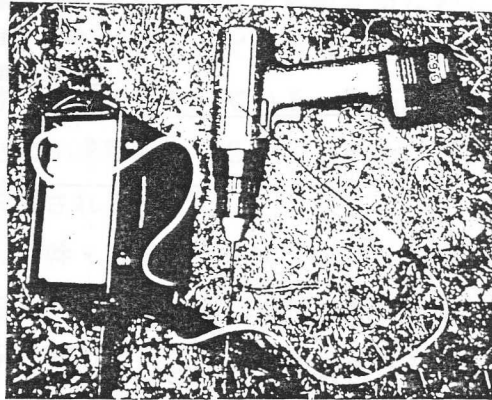
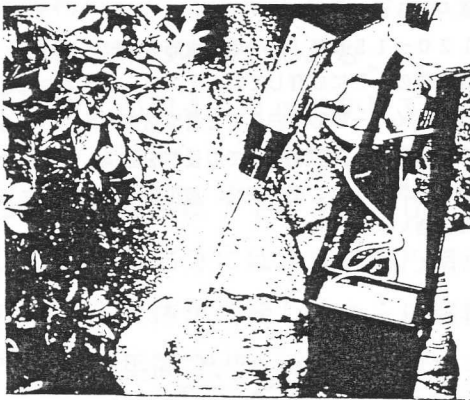


〔樹木診断用機器写真〕

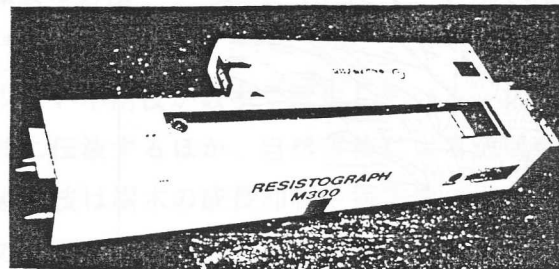
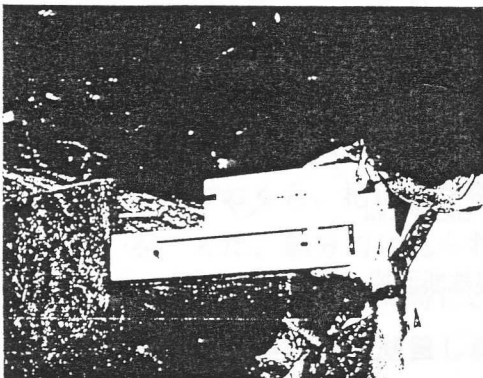
(インパルスハンマー)



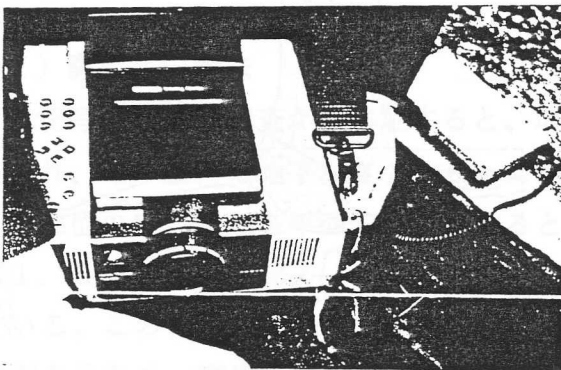
(シャイゴメーター)



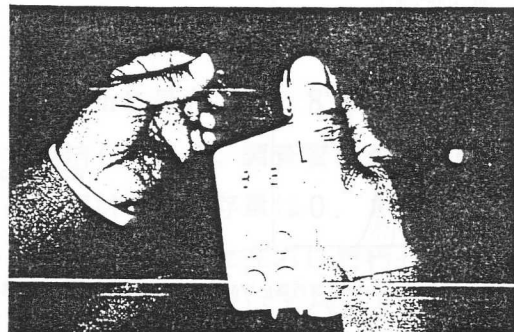
(レジストグラフ)



(赤外線画像装置)



(葉緑素計)



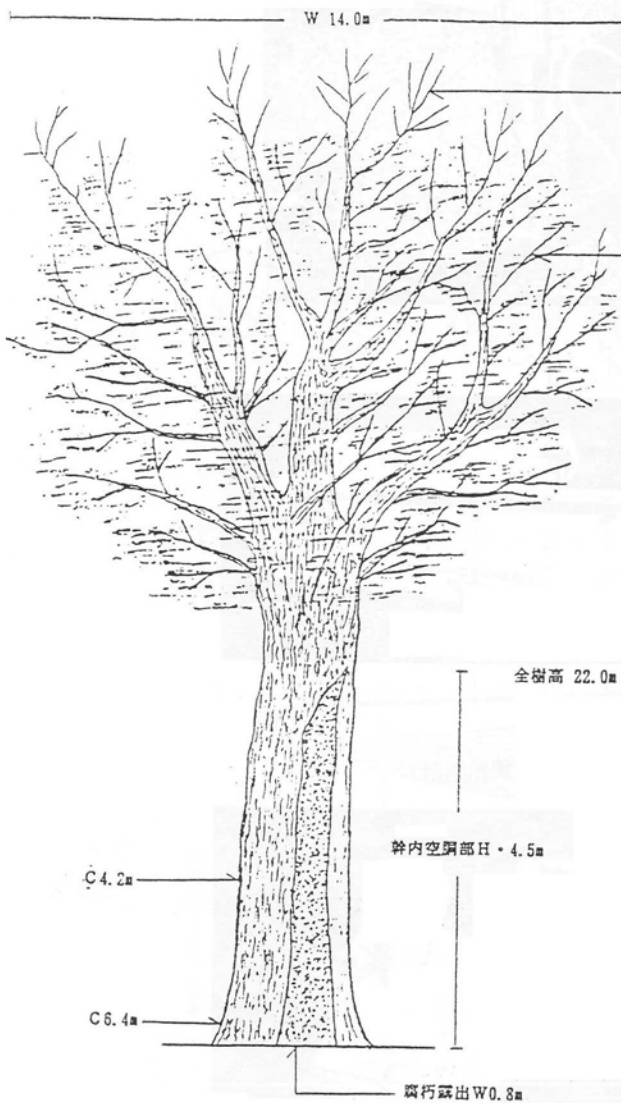
中山峠のミズナラの保全治療工程

齋藤 晶

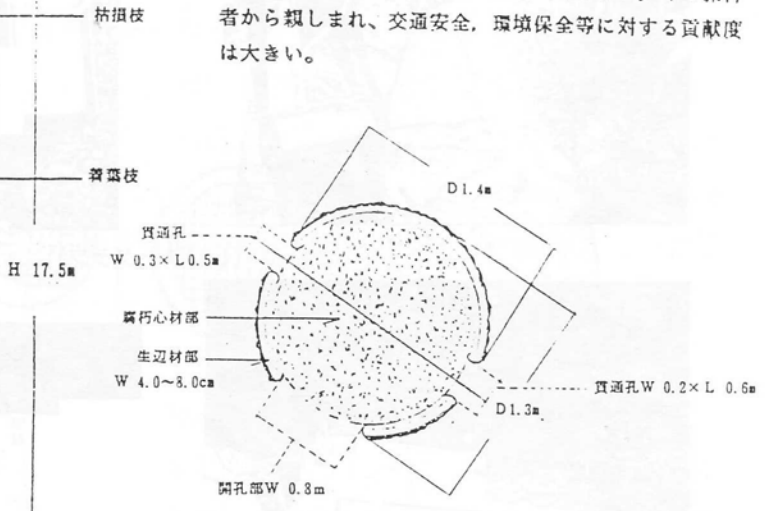
本報は、平成8年10月（財・北海道森林保全協会，日本データサービス株式会社・緑化計画室）で行った調査資料（札幌道路事務所管内・樹木維持管理計画策定業務の内R230号駐車帯内ミズナラ老木保全対策）の解析と、これまでに観察してきた多くの事例を参考にして取りまとめ（図説）したものである。

概況

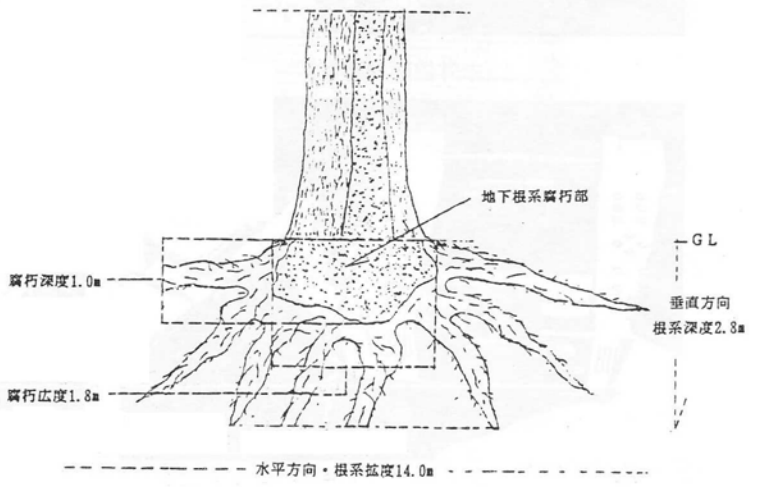
樹種	ミズナラ (<i>Quercus mongolica</i> var. <i>grosse-serrata</i> Rehd. et Wils.)
管理者	札幌開発建設部（札幌道路事務所）
樹高	22.0 m
幹周（胸高）	4.15 m
樹令（推定）	120～150年「同型樹の樹形より推定」
景観価値	駐車帯の一部に成育しているミズナラの巨木の緑と樹形はドライバーの心に安らぎと清涼感を与えてくれるほか、交行目標樹、離程樹としての役割をも果し、多くの旅行者から親しまれ、交通安全、環境保全等に対する貢献度は大きい。



ミズナラ樹形模式図



根株断面模式図 (地上0.5m)



根株の腐朽状態から推測した根系腐朽状況模式図

1) 成育現況

このミズナラは道路整備の際、樹群の中から駐車帯の環境保全を考慮して選定した天然性の孤立木である。この樹木は長年に渡り山頂の厳しい気象に耐えてきたが、モーターレーゼーションの発達による排ガス汚染、さらに樹木が成育する自然環境の変化（根系切断、根株元の盛・切土）、土壌の瘦地化などが誘因となり、このため樹冠部では枯損・不定枝の多発、また幹および根株部には、心・辺材にかけて相当量の木材腐朽の進行が確認される。

2) 幹・根株部の腐朽状況

心材腐朽によって幹・根株部に空洞が生じると風圧に対する抵抗度が弱まり、風倒被害が発生しやすい傾向にはなるが、直に全樹体を枯損させることは少ない。しかし辺材腐朽は、栄養供給の基部である形成層の破壊と水通導器管を遮断するため、全体的に枯損を早める傾向にある。

このミズナラは地下根株部約1.0 m、地上部約4.5 mにかけての心・辺材部に腐朽が生じている。腐朽症状が目立つ根株から地上1.0 m部位の区分材積（階層別求積表）は2.19～1.72 m³であるが、腐朽率は77.3～80.8%と求積される。

従ってこの部分には、木材腐朽菌が繁殖し、幹・根株部からナラタケ、カイガラタケなどの子実体が多発し、さらに腐朽進度を加速させる。腐朽進行は樹種によっても異なるが、年間2.6 cm巾で伝播することが知られている。このため適切な保全対策を施し、風倒被害の危険回避と樹命の延命を図ることが急務であると考えられる。

保全治療の方法

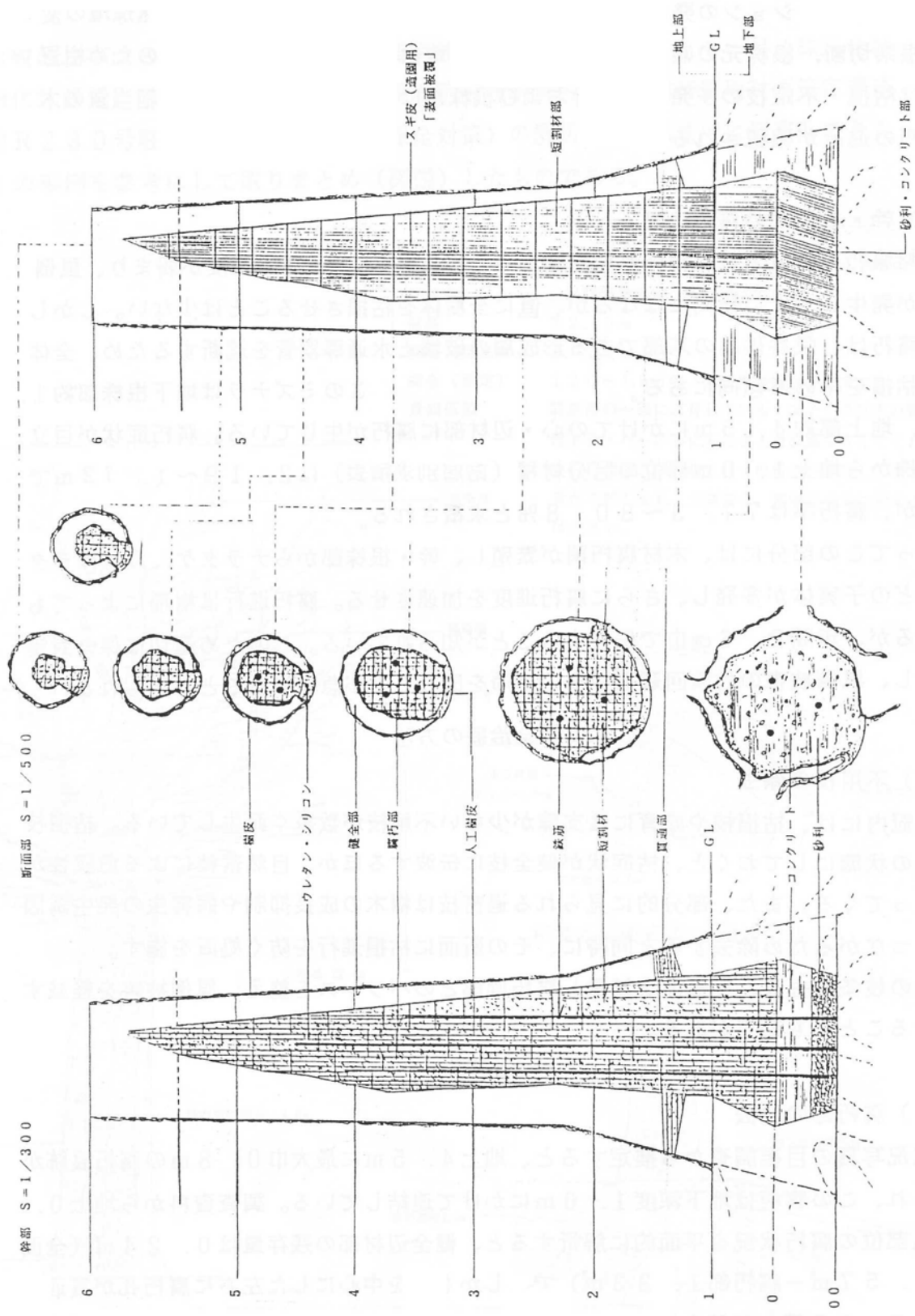
1) 不用枝の除去

樹冠内には、枯損枝や成育には支障が少ない不用枝が数多く派生している。枯損枝をこの状態にしておくと、枯症状が健全枝に伝播するほか、自然落枝による危険性が高まってくる。また、部分的に見られる過密枝は樹木の成長抑制や病害虫の発生誘因にもつながるため除去すると同時に、その断面に枯損進行を防ぐ処置を施す。

この枝条除去は、樹冠部を減量し腐朽幹部とのバランスを整え、風倒被害を軽減させることにも効果がある。

2) 腐朽部の除去

現況写真の目視調査から推定すると、地上4.5 mに最大巾0.8 mの腐朽痕跡が見られ、この腐朽は地下深度1.0 mにかけて連結している。調査資料から地上0.5 m部位の腐朽状況を平面的に解折すると、健全辺材部の残存量は0.24 m³（全面積1.57 m²－腐朽部1.33 m²）で、しかも幹を中心にした左右に腐朽孔が貫通している。この僅かな健全樹皮部と辺材部によって樹体を支えているが、支持力にも限界があるため、腐朽部を人工および機械処置によって完全除去して、空洞溝を填充し、樹体を補強する必要がある。



腐付幹部の治療模式図

3) 殺菌消毒

腐朽部の木片・粉塵等を完全に除去した後、幹内の空洞溝の材壁面に対し、木材腐朽菌の蔓延を防ぐため、殺菌剤（トップジンM水和剤）を数回散布し、その表面にアクリル性樹脂をスプレーして雑菌の再殖を完全に防止する。

4) 空洞溝の填充

幹内腐朽部（含む根株内）の大きさを円錐台求積式（階層別）によって計算すると、合計 10.10 m^3 に対し腐朽部 6.23 m^3 （61.6%）、健全部 3.87 m^3 （38.4%）である。填充は、この空洞溝内（ 6.23 m^3 ）に対して行うものである。作業工程は、腐朽部分を完全に除去した後、根株部分の底部に砂利を取入れ、その上にコンクリートを流し込み、中央部に鉄筋（3本）を組立て固定する。次に各鉄筋を中心にして、短割材（完全防腐殺虫処理した小角材）約 3.0 m^3 （層積×実積係数＝換算値）を内部に組入れる。また割材間に生じる隙間や穿孔部には発泡ウレタンやシリコン樹脂を注入しながら幹内と切開部を密閉被覆する。この治療（外科手術）を施すことによって、樹木は「ゆ合組織」が発達し傷口に新たな皮部組織が再成される。

5) 幹の表面仕上げ

切開部を密閉被覆後は、表面に人工樹皮（デンドローサン）を $0.5\sim 0.7\text{ cm}$ の厚さに塗布し、その上にスギ皮（造園用）を張付け切開部の乾燥と雑菌の侵入を防ぐ保護手当を施す。

6) ワイヤロープ支柱の取付け

一連の保全治療を施すことによって樹体は補強されるが、風衝地に成育し巨大な樹冠を有するこのミズナラは、正面に風圧を受け安いことから、風倒被害を未然に防ぐ策が必要である。風倒防止支柱の取付け方法は樹体を中心として、3方向にシステムワイヤロープ支柱（ $\phi 12\text{ mm}$ ワイヤロープの全体をグラスファイバーでカラーコーティング）によって牽引する。この支柱を取付けることは、耐風性を高め、風による幹部や根系の動揺を防ぐという効果がある。

7) 土壌改良

ミズナラの成育地は、駐車帯から小高く盛上がった丘に位置していることから、天然的に供給される栄養分（肥料）は、流出し欠乏状態にある。このため樹冠先端部の垂直下に位置する地面上に土壌改良を兼ねた施肥穴（ $0.4\times 0.6\text{ m}$ ・約 3.0 m 間隔）を掘り、この中に有機質・化成肥料の補給と良質土壌によって客土を施し、樹勢回復に努める必要がある。なお、地表面は芝生によって覆われているため、施肥・穴掘りによって剥取った芝は、作業終了後その位置に植え戻し、現状復元に努める。

（環境緑化計画株式会社）

樹冠部を減量し腐朽幹部とのバランスを保つ

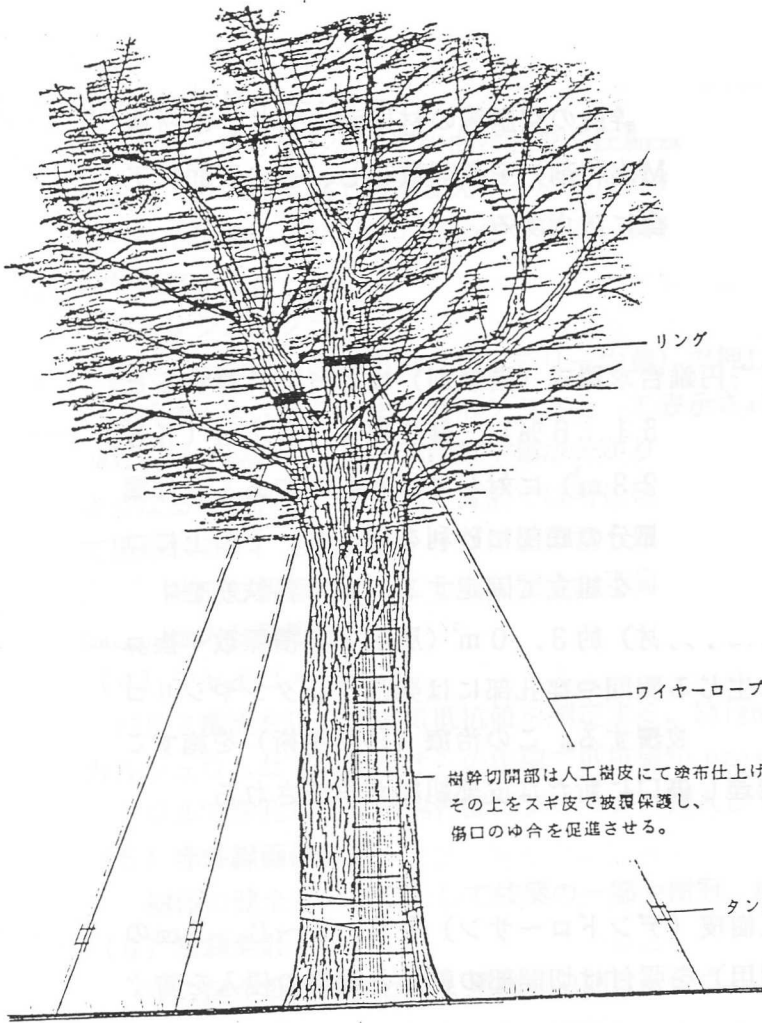
円錐台

$$\text{求積式 } V = \frac{\pi h}{3} (r^2 + Rr + R^2)$$

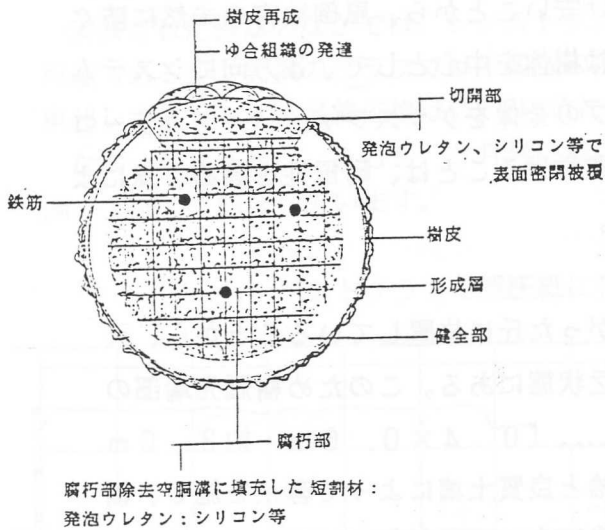
区分階層別求積表

No.	腐朽部		健全部	
	㎡	%	㎡	%
5~6	0.32	23.0	0.19	77.0
4~5	0.94	29.7	0.28	70.3
3~4	1.04	55.1	0.57	44.9
2~3	1.25	55.7	0.69	44.3
1~2	2.19	73.3	1.61	26.7
0~1	1.72	80.3	1.39	19.2
0~00	2.14	69.7	1.50	30.3
計	10.10	61.6	6.32	38.4

※ 砂利・コンクリート填充部(0~00) 1.50㎡
 填充短割材 6.23㎡ - 1.50㎡ = 4.73㎡
 填充短割材使用量 4.73㎡ × 実積係数 0.6 = 2.84㎡

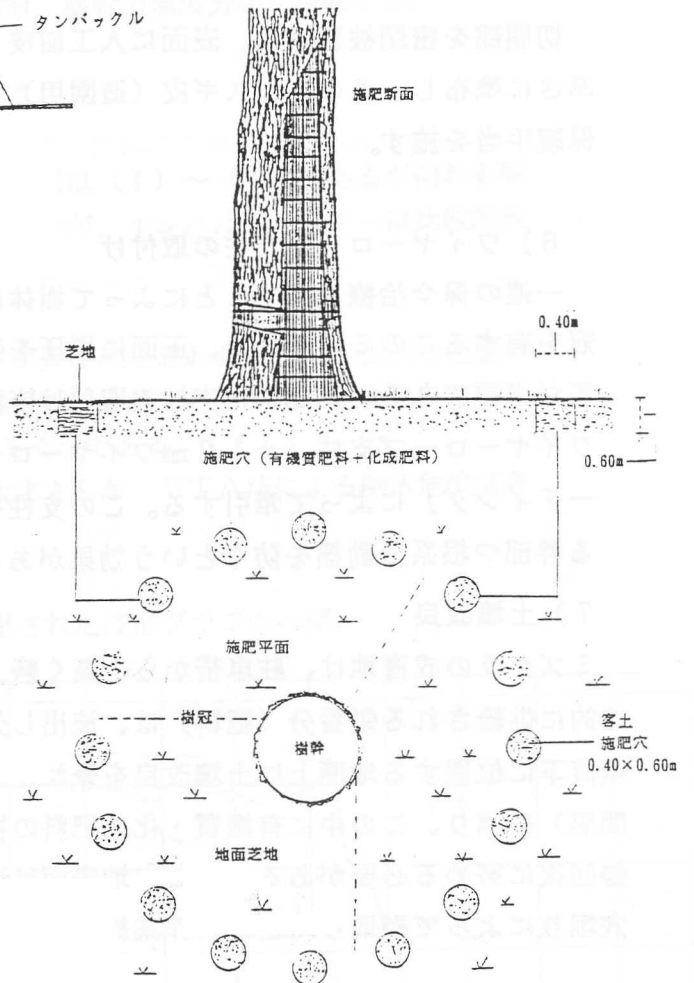


治療完成模式図



腐朽部除去空洞溝に填充した短割材：
 発泡ウレタン：シリコン等

空洞補修・癒合促進工程模式図



樹冠下施肥方法模式図

館 和 夫

春本番で、「樹守」の皆様もさぞお忙しいことでしょう。「啓蟄」（虫が這い出す日）といわれる時期は陰暦の2月、太陽暦ならば3月6日頃で、いずれも本道では実感がわきませんが、4月も半ばともなればろいろな虫が這い出してきて、巧まざる季節感を演出してくれます。病害虫の盛りは5、6月の場合が多く、時期を過ぎるとその年の実質被害は回避できなくなる場合が多いので、防除は早めに行いましょう。

参考までに平成5年に札幌市で行われた樹木医講演会の際に配布した、道南地方の緑化樹を中心とした主要病害虫名のリストを以下に再録いたしますので、ご利用ください。

樹種別にみた主な病害虫 [下線は緑化樹として、とくに重要とおもわれる病害虫。]

《針葉樹》 <> は主として山地に {} は苗畑に多く見られる病害虫]

[イチイ] スギマルカイガラムシ、イヌガヤワタカイガラムシ、アオキシロカイガラムシ、マツアトキハマキ、シロツバメエダシャク、ナガチャコガネ、すす病

[トドマツ] トドマツノハダニ、トドノネオオワタムシ、<トドマツノタマバエ、トドマツオオアブラムシ、ツガカレハ、トドマツノキクイムシ、オオトラカミキリ>、すす病、てんぐす病、{灰色かび病} {立枯病}、<枝枯病、溝腐病> [エゾマツ] エゾマツカサアブラムシ、<エゾマツオオアブラムシ> [アカエゾマツ] 暗色雪腐病

[ヨーロッパトウヒ] クロスズメ、{根腐病} [カラマツ] <カラマツカサアブラムシ、カラマツイトヒキハマキ、マイマイガ、マツノオオクイ、先枯病、落葉病、ならたけ病> {立枯病} {灰色かび病} [ハイマツ] マツカサアブラムシ [キタゴヨウマツ] マツカサアブラムシ、<マツノクロホシハバチ>、さび病、すす病 [アカマツ・クロマツ] マツオオアブラムシ、マツカキカイガラムシ、マツアワフキ、マツバナタマバエ、マツノシンマダラメイガ、マツノマダラメイガ、マツノトビマダラシムシ、マツカレハ、マツノキクイムシ、マツノコキクイムシ、マツキボシゾウムシ、{立枯病}、葉枯病、皮目枝枯病、こぶ病、すす病 [ヨーロッパアカマツ] マツノシンマダラメイガ [ストロブマツ] <マツノミドリハバチ、マツノクロホシハバチ> [モンタナマツ] マツツマアカシムシ [スギ] スギノハダニ、スギタマバエ、スギメムシガ、スギノアカネトラカミキリ、ヒメスギカミキリ、コウモリガ、{赤枯病}、黒粒葉枯病、黒点枝枯病、ならたけ病 [ヒノキアスナロ] スギノアカネトラカミキリ、ヒメスギカミキリ、てんぐす病 [ビャクシン・カイズカイブキ] さび病

《広葉樹》 [ドロノキ] ドロタマワタムシ、ドロノキハムシ [ポプラ・ヤナギ類] ポプラハバチ、オビカレハ、セグロシャチホコ、ヤナギドクガ、リンゴドクガ、コウモリガ、ヤナギシリジロゾウムシ、ゴマダラカミキリ、ウスバカミキリ、キトスポラ胴枯病、葉さび病 [テウチクルミ] クルミホソガ、クルミシントメキバガ、ムラサキイラガ、クスサン、シャチホコガ、クルミハムシ [オニクルミ] クルミハムシ、さび病 [シラカンバ] シラカバノクロホシハムグリハバチ、モンクロシャチホコ、<マイマイ

ガ) [キイチゴ類] マメコガネ [スグリ類] さび病 [ハンノキ類] <ハンノキハムシ>、ゴマダラカミキリ、さび病 [ミズナラ] トビモンオオシャチホコ、うどんこ病 [カシワ] カシワハナフシ、うどんこ病 [ブナ] <ブナハアブラムシ、ブナカイガラタマバエ、ブナヒメシンクイ、ブナアオシャチホコ>、ムラサキイラガ、アカヒゲドクガ、うどんこ病 [クリ] トドマツノハダニ、クリオオアブラムシ、クリブチアブラムシ、クリイガアブラムシ、サザナミキヒメハマキ、カクモンハマキ、ムラサキイラガ、マイマイガ、ナシケンモン、クスサン、オオミズアオ、クリミガ、クリミドリシンクイガ、クリタマバチ、ゴマダラオトシブミ、クリシギゾウムシ、白点胴枯病、胴枯病、うどんこ病 [ハルニレ] ニレメンチュウ (=オカボノクロアブラムシほか)、ヒオドシチョウ [ケヤキ] ケヤキフシアブラムシ [ヤマグワ] クワゴ、クワゴマダラヒトリ [ムラサキメギ] アケビコノハ、すす病 [ヒイラギナンテン] アケビコノハ [ブラタナス=モミジバズカケノキ] ヒモワタカイガラムシ、ヒメシロモンドクガ、クワゴマダラヒトリ [ハマナス] ハマナスタマバチ、ドクガ、さび病 [ウメ・モモ] ウメコブアブラムシ、モモアカアブラムシ、ウメシロカイガラムシ、ウメエダシャク、オビカレハ [エゾヤマザクラ=オオヤマザクラ] ササキコブアブラムシ、サクラコブアブラムシ、キビクビレアブラムシ、オビカレハ、コスカシバ、てんぐす病、がんしゅ病=胴枯病、デルメア枝枯病、フォモプシス枝枯病、こぶ病

[ソメイヨシノ・サトザクラ各種] ササキコブアブラムシ、クロスジホソアワフキ、マイマイガ、イラガ、テングイラガ、ヒメシロモンドクガ、モンシロドクガ、リンゴケンモン、モンクロシャチホコ、オビカレハ、コスカシバ、エゾシロチョウ、アカタデハムシ、葉枯病、幼果菌核病、てんぐす病、根頭がんしゅ病、がんしゅ病=胴枯病、デルメア枝枯病、フォモプシス枝枯病 [ボケ・ナシ] ヒメシロモンドクガ、クワゴマダラヒトリ、赤星病 [ヒメリンゴ] リンゴスガ [ナナカマド] オビカレハ、モンシロドクガ、ヒメシロモンドクガ、ならたけ病 [ネムノキ] キジラミの1種 [ニセアカシヤ] ハリエンジュノアブラムシ、ベッコウタケ [サンショウ] アゲハチョウ、帯化病

[クサツゲ] ツゲノメイガ [マサキ] マサキスガ [マユミ] マユミノスガ [ヤマモミジ] 小黑紋病、うどんこ病 [ノムラカエデ] イラガ、ムラサキイラガ、オオケンモン、うどんこ病 [ルブルムカエデ] ゴマダラカミキリ [トチノキ] クスサン [ツタ・ヤマブドウ] ブドウスズメ、トビイロトラガ [コクワ=サルナシ] トビイロトラガ [ムクゲ] ワタノメイガ、オオアカキリバ [ミズキ] キアシドクガ [エゾムラサキツツジ] ツツジゲンバウムシ [ヤマツツジ] ドクガ、クワゴマダラヒトリ [サツキ] もち病、すす病 [レンゲツツジ] ツツジゲンバウムシ [リュウキュウツツジ] ツツジコナカイガラムシ、ツツジコナジラミ、すす病 [サラサドウダン] カタカイガラムシの1種 [サワフタギ] シロシタホタルガ [イボタノキ] イボタロウカイガラムシ、ホシシャク [ヤチダモ] マエアカスカシノメイガ [アオダモ=コバノトネリコ・ヨーロッパトネリコ] カタカイガラムシの1種 [ライラック=ムラサキハシドイ] ナガチャコガネ [キリ] ウスオビヤガ、カラスヨトウ、シモフリスズメ、腐らん病 [カンボク] サンゴジュハムシ [タニウツギ] オビガ

(林業試験場道南支場の
林業相談資料より)

北海道支部は現在、9名の正会員（樹木医）と、他に賛助会員として道内各地の造園緑化関係者24名によって構成されている。

1. 北海道支部の総会

当支部の総会は、平成8年4月14日札幌市において開催された。総会に先立ち、斉藤晶樹木医による特別講演「アメリカにおける緑化事業」をテーマに講演が行われた。

内容は平成7年9月3日から、9月11日までポストンなどアメリカ東部地方の植物園等の新しい樹種、造園技術等についての視察・研修結果をスライドを使用して詳しく説明された。

また、総会では、平成7年度の活動結果と収支決算、平成8年度の活動計画や収支予算について協議した。

2. 支部の広報活動

(1) 平成6年度から平成7年度にかけて、当支部の各樹木医が共同で執筆した朝日新聞の「樹木の診察室」、北海道新聞の「樹木医ノート」を、各新聞社の了解のもとに「北海道の樹の特徴と育成・保護」として製本し、会員、賛助会員、関係者に配布した。

「樹木の診察室」は巨木、名木の診断や治療の技術について解説したものであり、「樹木医ノート」は樹種の特徴や育成・保護について解説したものである。

(2) 支部機関紙「樹守」の発行

会員相互の技術、情報交換の場として、支部結成以来発行しているもので、今回は第5号である。

紙面内容は、各会員の樹木診断や治療結果等を詳説する他、関連する新しい情報を掲載している。

3. 青森県との交換研修会の開催

平成8年1月20日～21日、当支部の函館市に存在する樹木医3名（斉藤、館、山上）と青森県の樹木医9名による「樹木の外科的治療」の技

術交換会が開かれた。

研修の対象となった治療木はトチノキ神社（函館市亀尾）の神木となっている「トチノキ連理木」で、斉藤樹木医が外科的に治療を行った結果を見学し、質疑を行った。交換研修は今後も続ける予定である。

4. 「樹木の病気相談コーナー」の開設

北海道営林局では例年5月に「北の森21」の運動の一環として、緑化樹即売会を庁舎前庭で開催している。

この会場内で札幌市に在住する樹木医3名（小田島、佐々木、橋場）による「樹木の病気相談コーナー」が開設され、病害虫防除や衰退木の診断等について、市民等からの相談や質問に対応した。

5. 道内における「樹木診断・治療」の状況

近年道内においても巨木、名木、公共緑化樹木の樹勢診断や治療についての要請が年々増加しており、その都度道内各地の樹木医が対応している。

また、地域や時期によって、片寄ったり、要請数が多くなる場合は、互いに支援を求め、対応している。

樹木の診断調査や治療技術について要請、依頼相談はおおよそ、次の通りである。

- ① 街路樹、公園樹、防災林等～国、道、市町村
- ② 指定記念木、記念保護樹木、保存樹木等～道、市町村
- ③ 研修会、講習会 講演会～国、道、市町村
- ④ 一般的庭園樹、果樹等～一般住民
- ⑤ 電話、来訪による相談～市町村、一般住民

以上のように主として公共的緑化樹木が大部分である。

また、電話や来訪による相談や質問も年々増加しており、樹木医の活動が広く認識されてきていることもあって、今後はより高度の技術や知識が必要となってくるものと考えられる。

（事務局）

「樹木医」の名称が商標登録される

平成4年11月13日付で日本緑化センターが商標登録を出願していた「樹木医」の商標登録は、平成9年2月13日付で登録査定があり、同月28日付で認証されて正式に登録されることになった。それゆえ「樹木医」の名称は、今後、日本緑化センターの許可なく営利目的のためには使用できない。

日本樹木医会会章などの図案決まる

会員一同待望の樹木医会のシンボルマークが、このほど専門家の手によって図案化され、公表された。本章は黒のバックに白抜きで、力強い生命力を感じさせる裸木が1本、左右対称に枝を広げている図柄（右図参照）で、周囲には英文と和文で、日本樹木医会の会名が表示されている。

名刺などに用いられるロゴタイプも同時に決まり、注文者にはまもなく立派なバッジも届けられるはずである。緑の守り手にふさわしいシンボルマークを得たのを機会に、会員一人ひとりがこの際、決意を新にして頑張りたいものである。

マーク

本章



バッジ章



ロゴ

略章



日本樹木医会

編集後記



「今年は去年にひきかえ、雪の少ない楽な冬でしたね」というのが、春先までの共通の話題であった。しかし、その分だけ今後は水が少ないとか、虫が多いとか、ノネズミが多くなるというようなことになるかもしれない。世の中は多面的なものであり「人間万事塞翁が馬」といい、「充つれば欠くる世の習い」ともいう。琵琶歌の「石童丸」には「月に村雲花に風、心のままにならぬこそ浮世に住める習いなれ」という名文句もある。ともかく、自然界にも人間界にも、予期せぬところに落とし穴があって大変な思いをさせられることが多い。

樹木医の仕事も同じで、制度発足の頃の華やかなお披露目の時期は過ぎ、今はあくまでも地味に、日頃の実績を問われるような時期に差し掛かっているようである。

科学的でかつ技術的にも高いレベルをたもった樹木医として、この広い北海道の中で、どう道を切り拓いて行くか、われわれの器量が試されている感じである。変な所で落とし穴にはまらぬよう互いに声を掛け合い、団結して研鑽を積みながら頑張っていきたいものである。（T生）